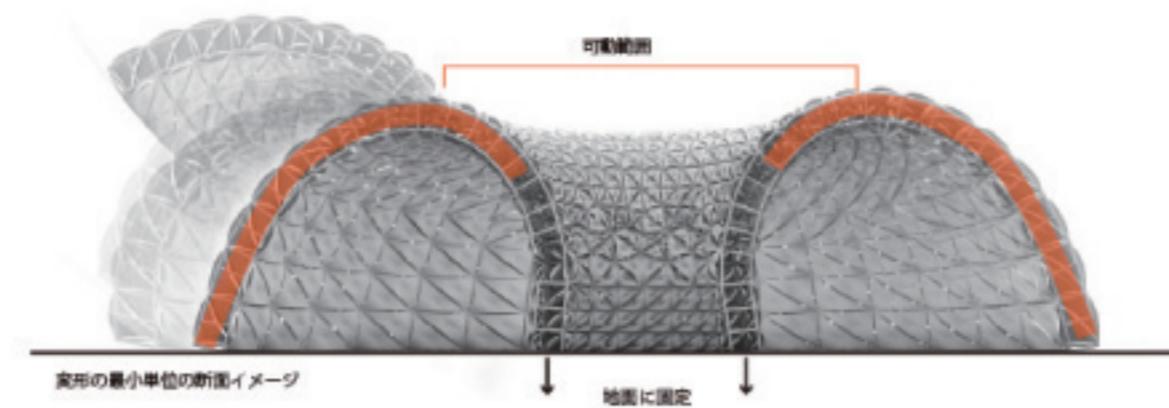
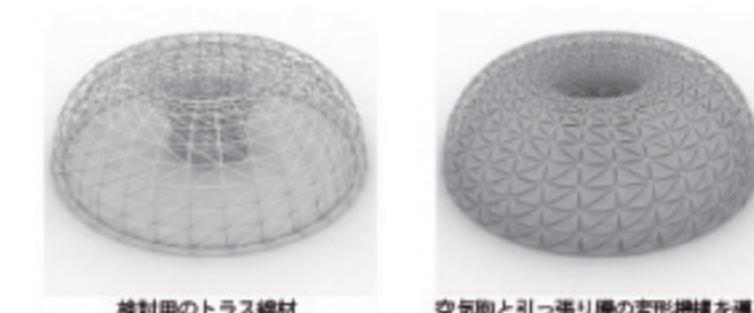


空間要素の最小単位

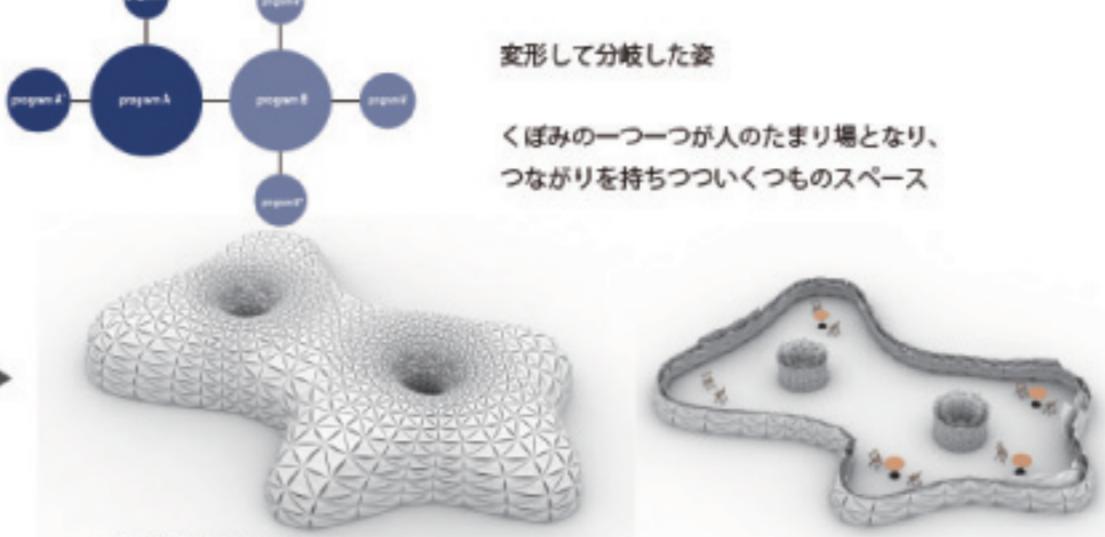
最小単位として単体の空間を操作する。

中心部を地盤に固定することによって、移動可能な構造が自由に動くことができる。

形状決定は割り当ての原理をコンピューターモデリングによって実現する。フォームファインディングのプロセスによって行う。



空間パターンの一例

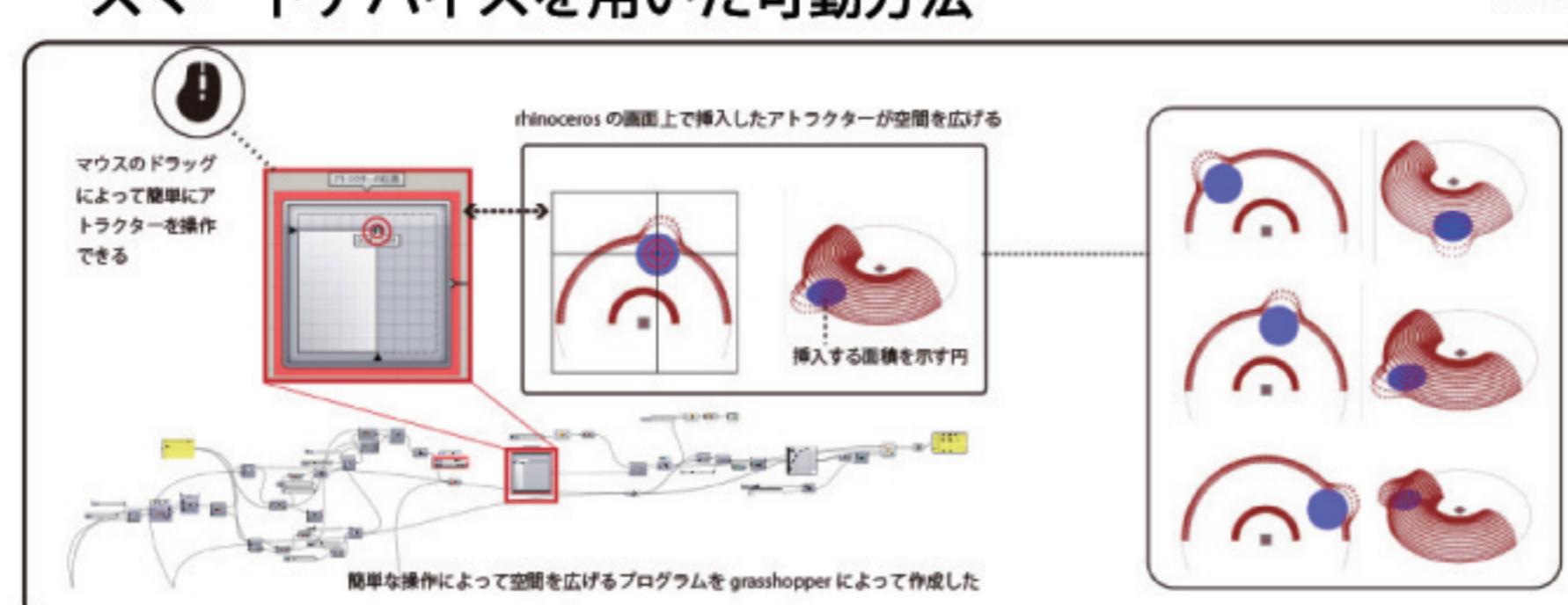


レクチャースペースやショッピングベースとして

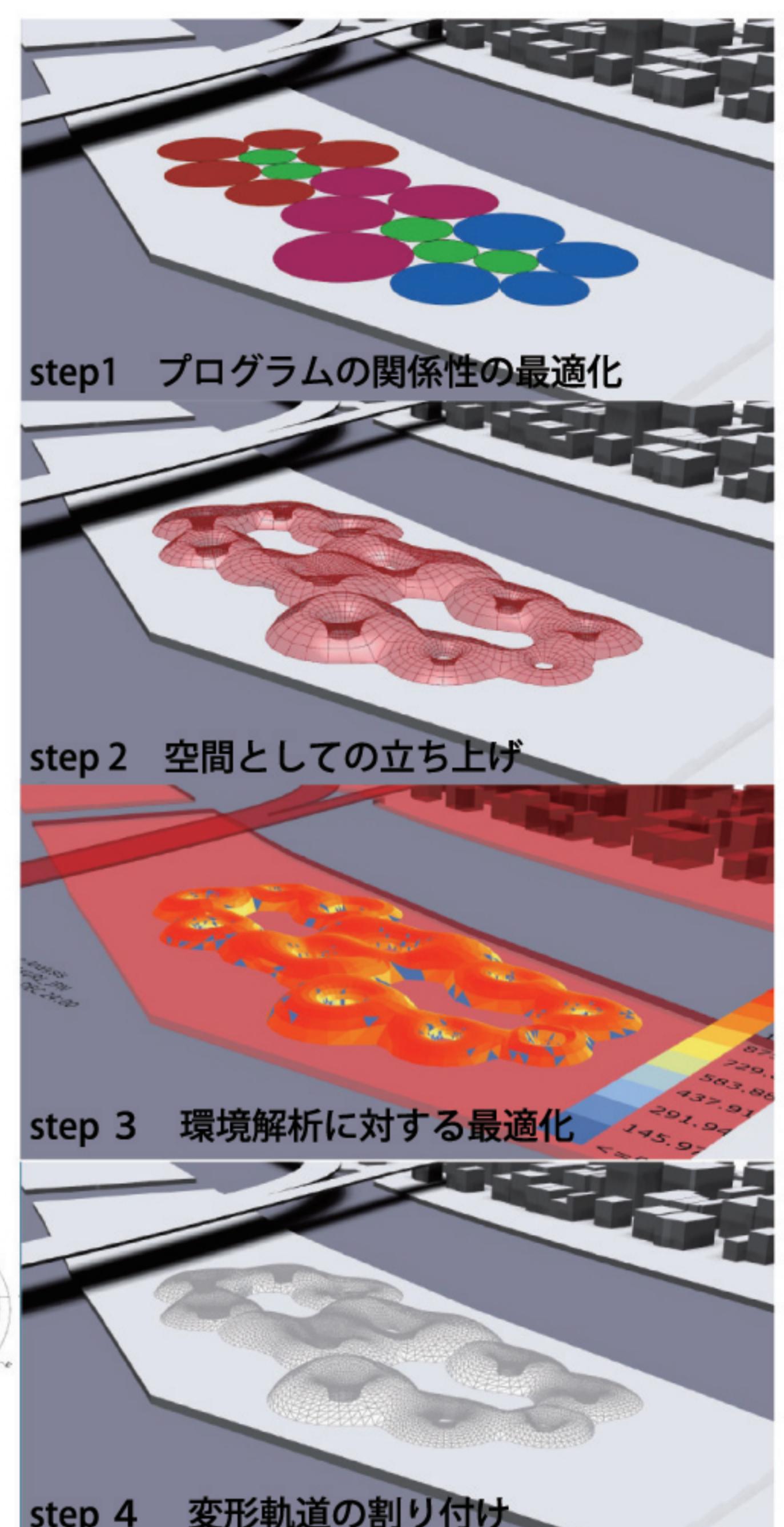
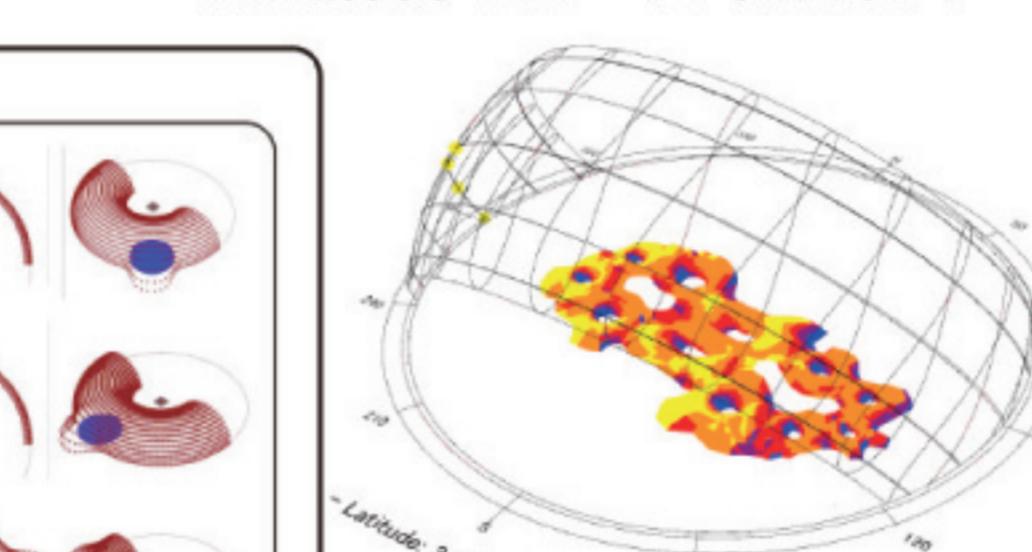


宿泊施設として

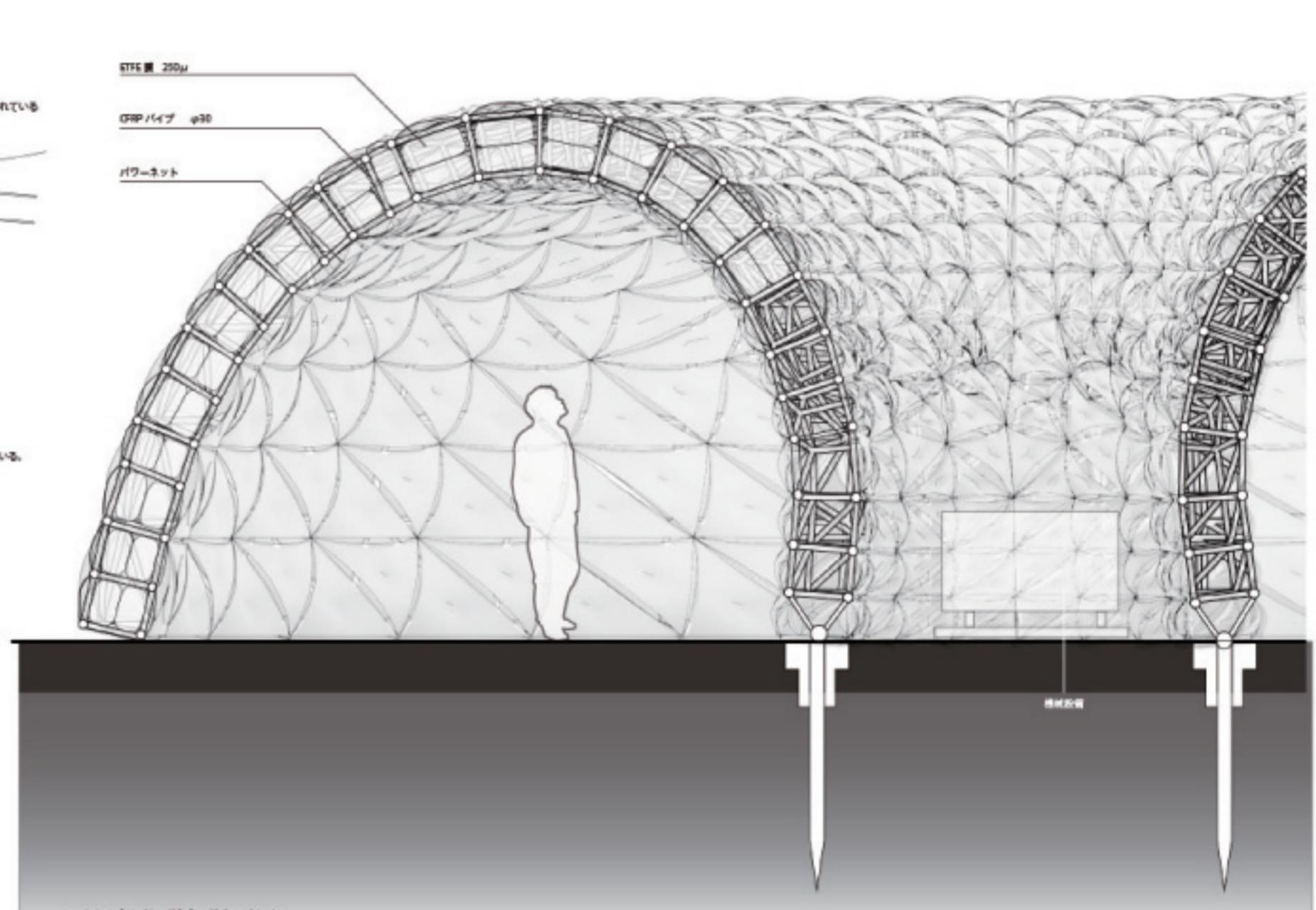
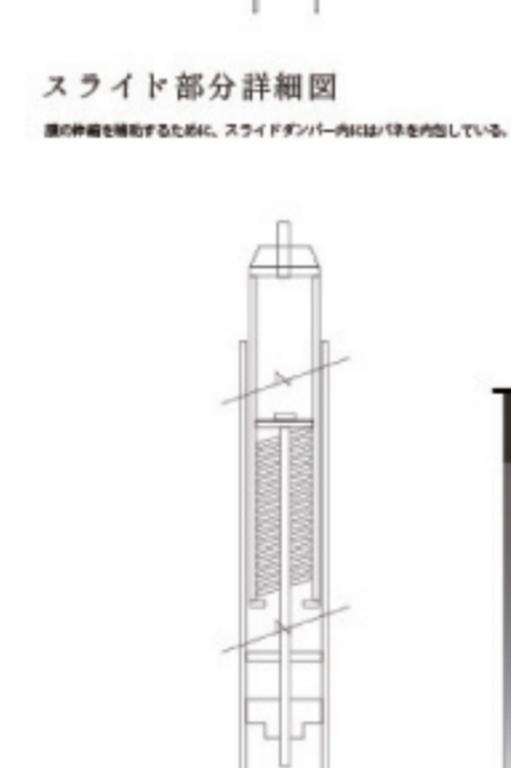
スマートデバイスを用いた可動方法



日照解析を用いた可動方法



部分詳細断面図



I_20 部分詳細断面図



全体断面図

長坂大賞

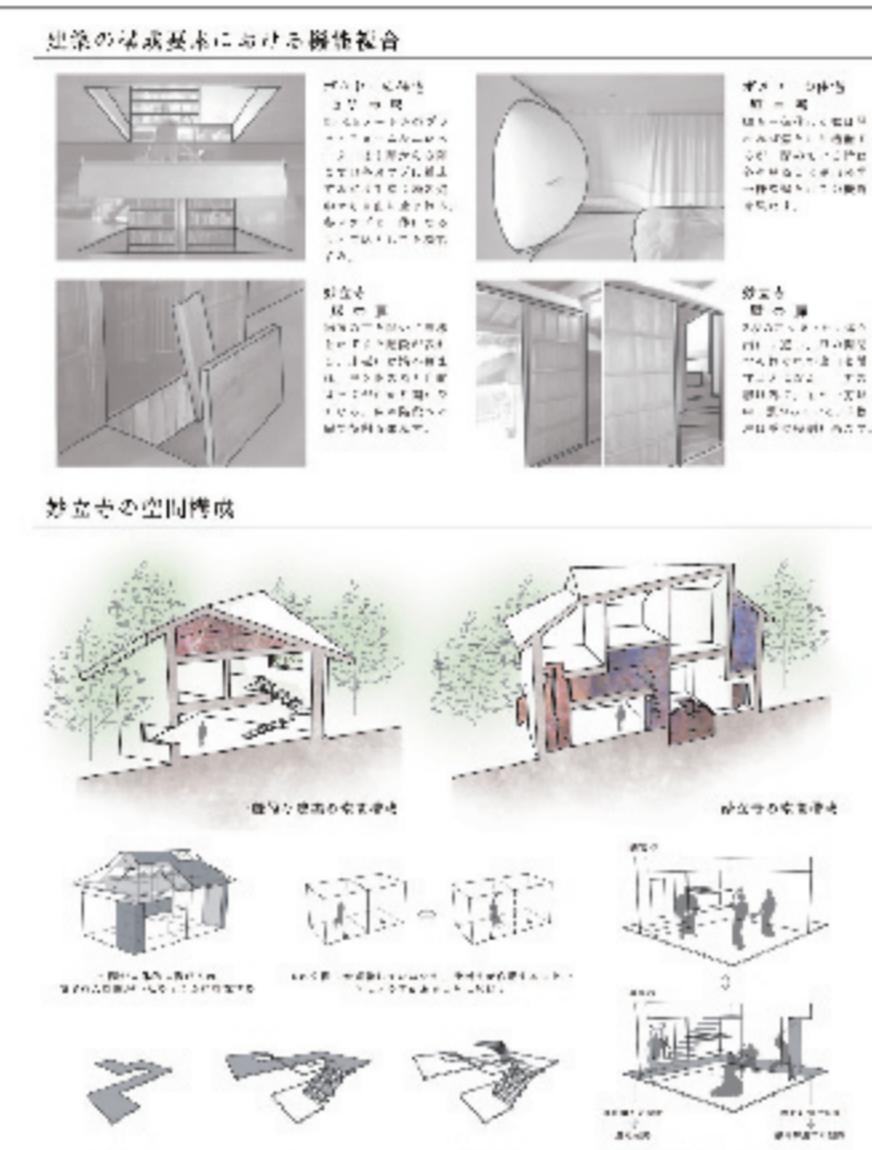
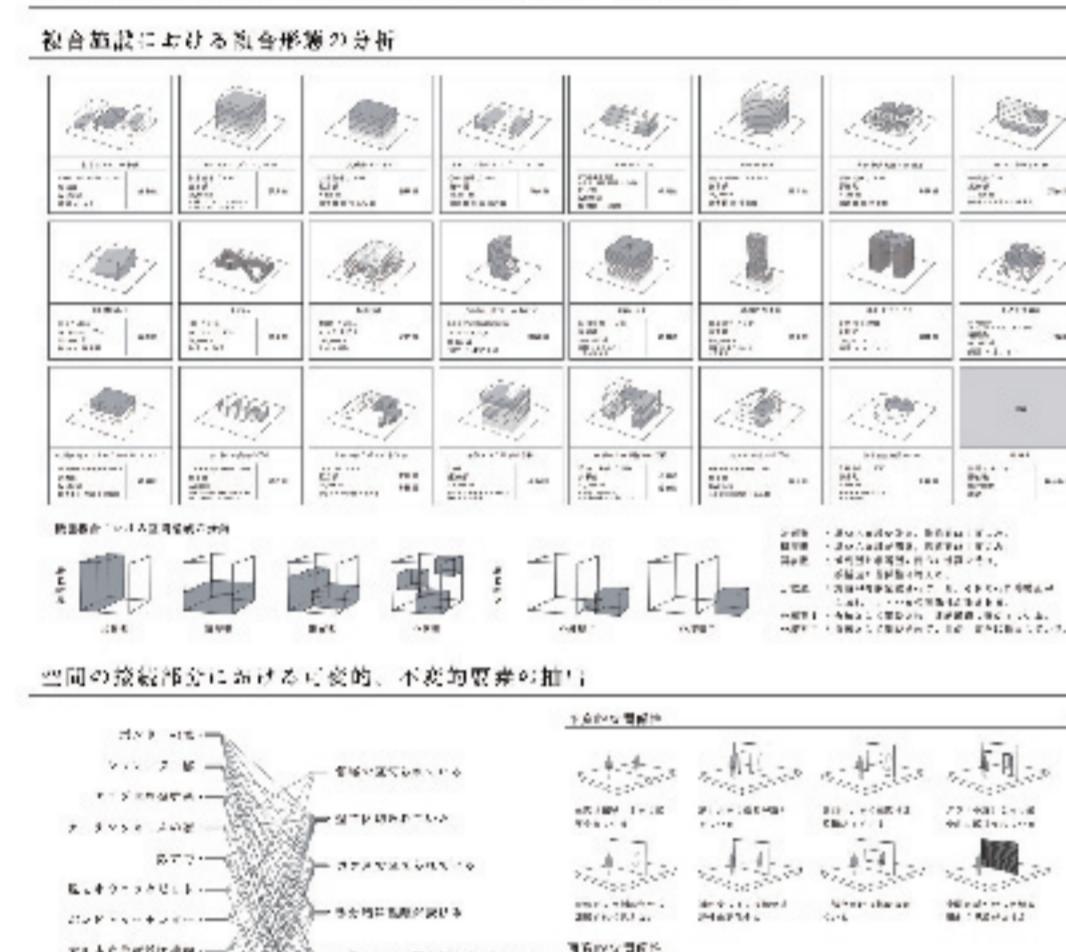
機能複合による空間変化を考慮した建築モデルの設計

三井 貴裕（楓橋研究室）

近年の急速に進む社会的、経済的な環境の変化に伴い、建築のニーズは多様化、複雑化している。このような社会において、複数の機能を併せ持つ複合施設が果たす役割は大きい。しかし、現在の複合施設は機能が分断されそれぞれ独立して計画されている場合がほとんどでありその用途は限定されている。

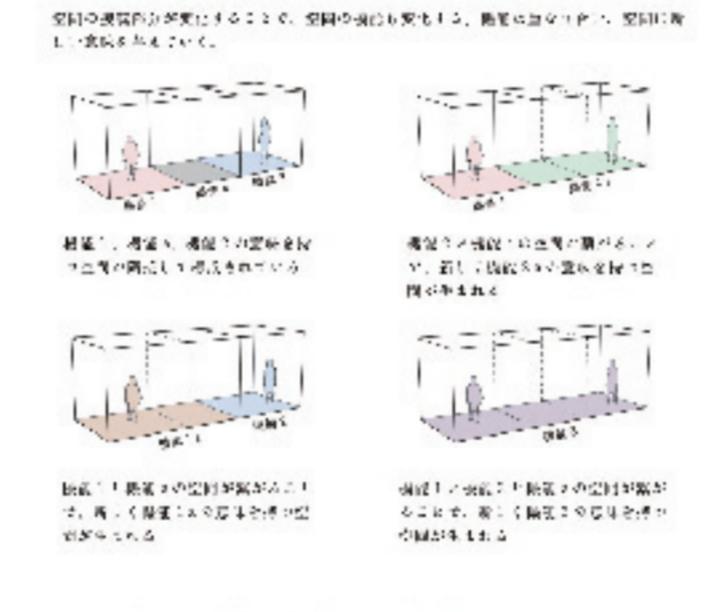
機能ごとに空間を分断するのではなく、機能複合による空間変化を考慮することで「異なる施設でも同じ機能を果たしている空間」や、「機能同士が混ざり合うことで新しい意味を持つようになる空間」を繋げるように建築を構成し、一つ一つの空間をより豊かに活用していく複合施設を設計する。

機能複合と空間変化に関する分析



空間構成手法

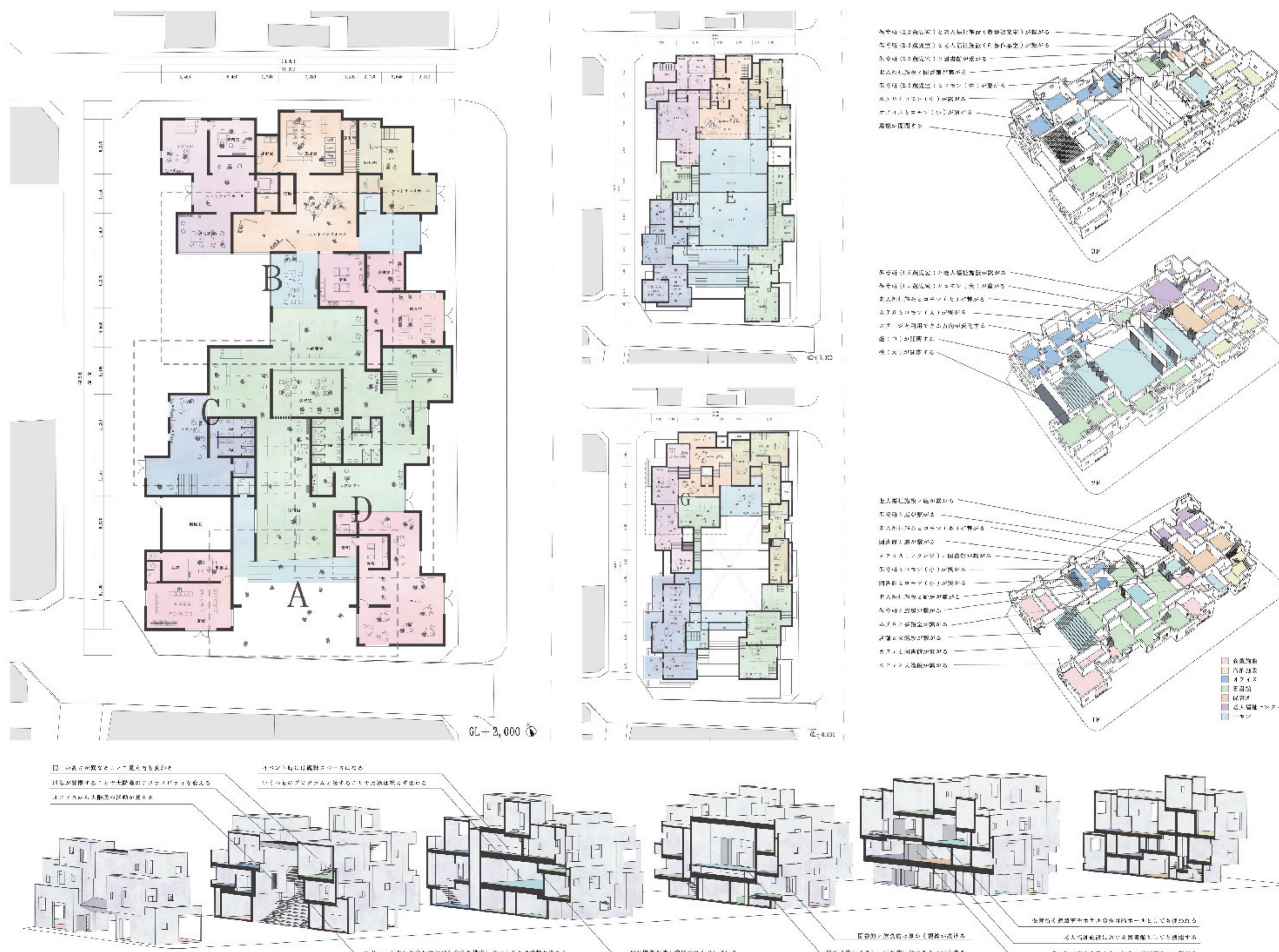
空間の複数部分における界線性



空間複数施設の一基化



全体構成





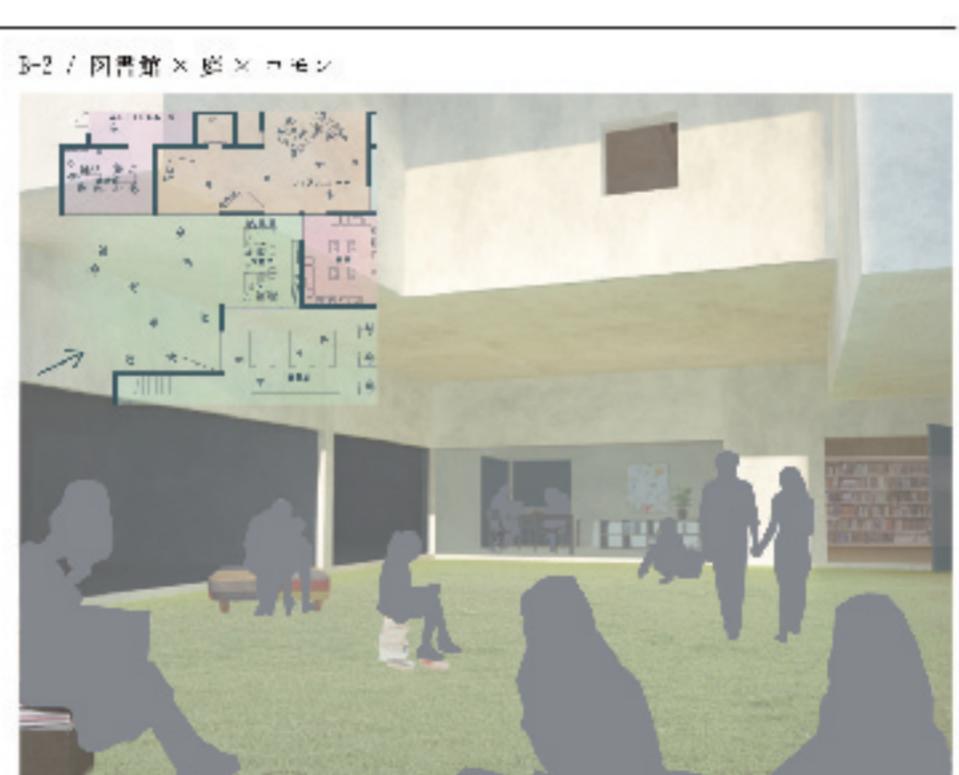
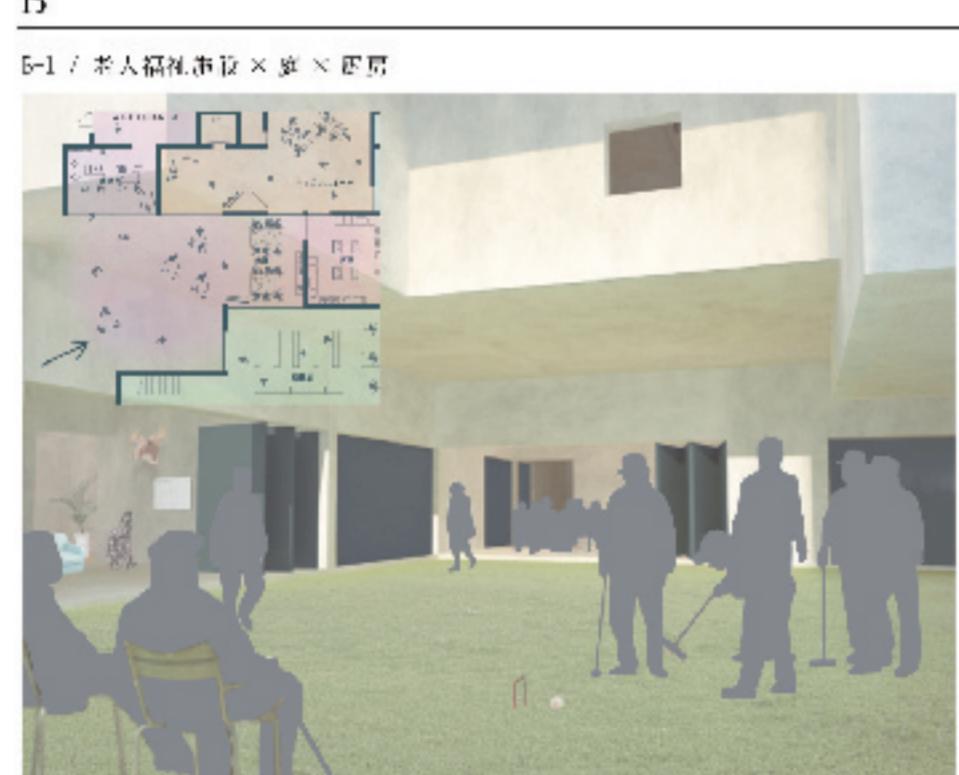
A



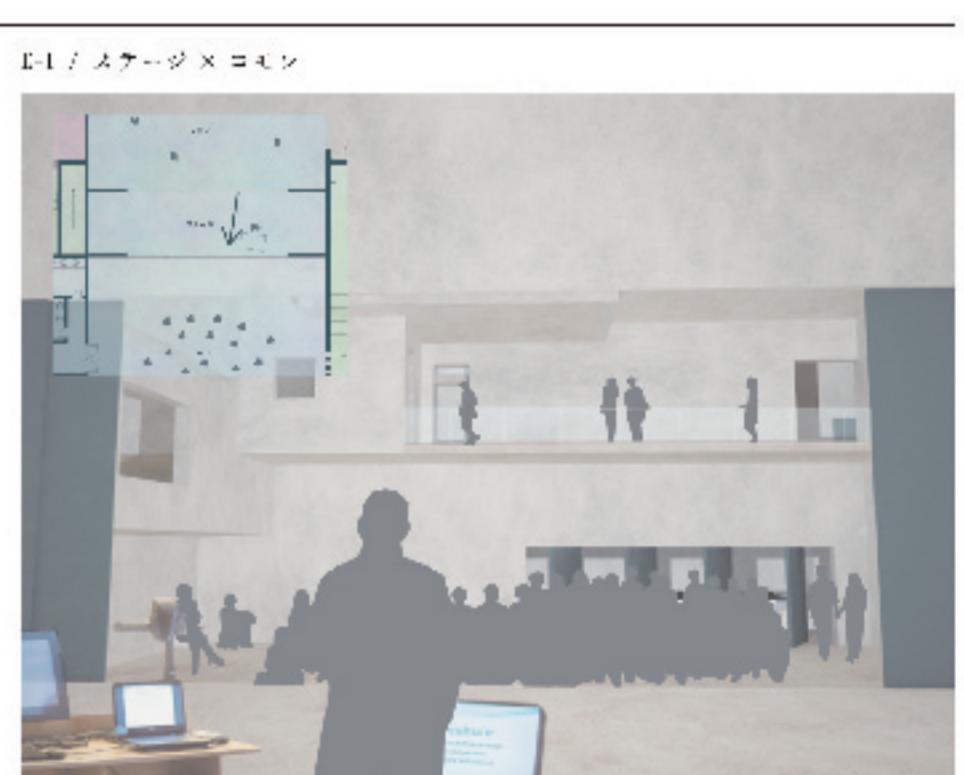
D



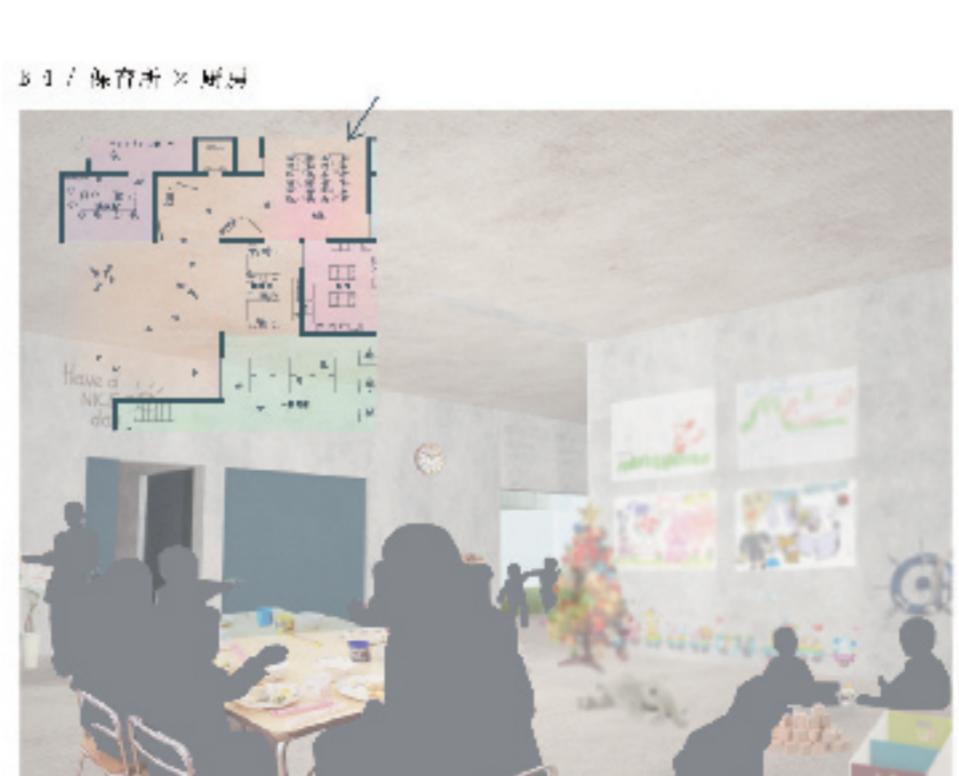
B



E



C



F



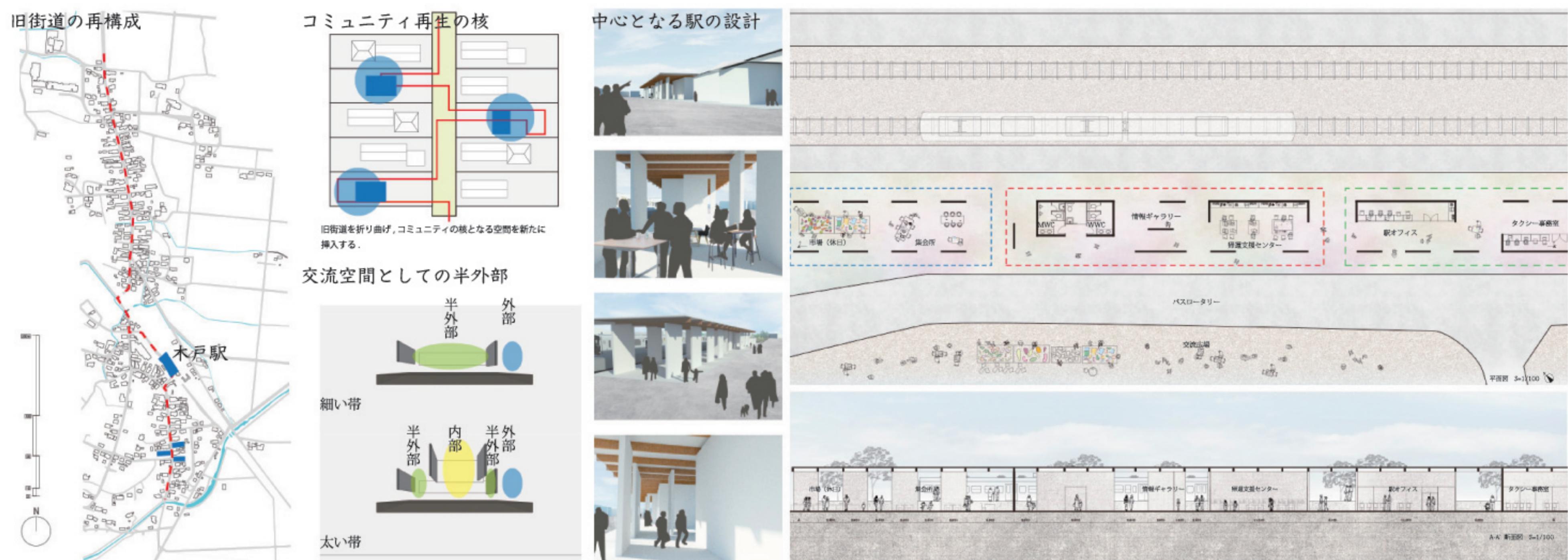
G



帰還期におけるコミュニティ再生のための風景の設計 一福島県双葉郡楢葉町における旧街道の分析を通じて一 小畠皓平（楢葉研究室）

2011年3月11日に起きた福島第一原子力発電所事故の影響で避難を余儀なくされた地域住民のふるさとへの帰還が、ようやく始まった。しかし急激な人口減とそれに伴う空き家の増加、耕作放棄地の拡大などによって、震災以前の地域コミュニティで見かける風景は失われてしまった。

対象敷地とする福島県双葉郡楢葉町で、旧街道における宿場町の空間性を織り込み、帰還した地元民や外部から来た人々にとって豊かな歩行者空間を提案する。歴史的資産である旧街道を起点に、町全体に新たな活気を生み出し、ふるさとへの帰還をより促す計画となる。

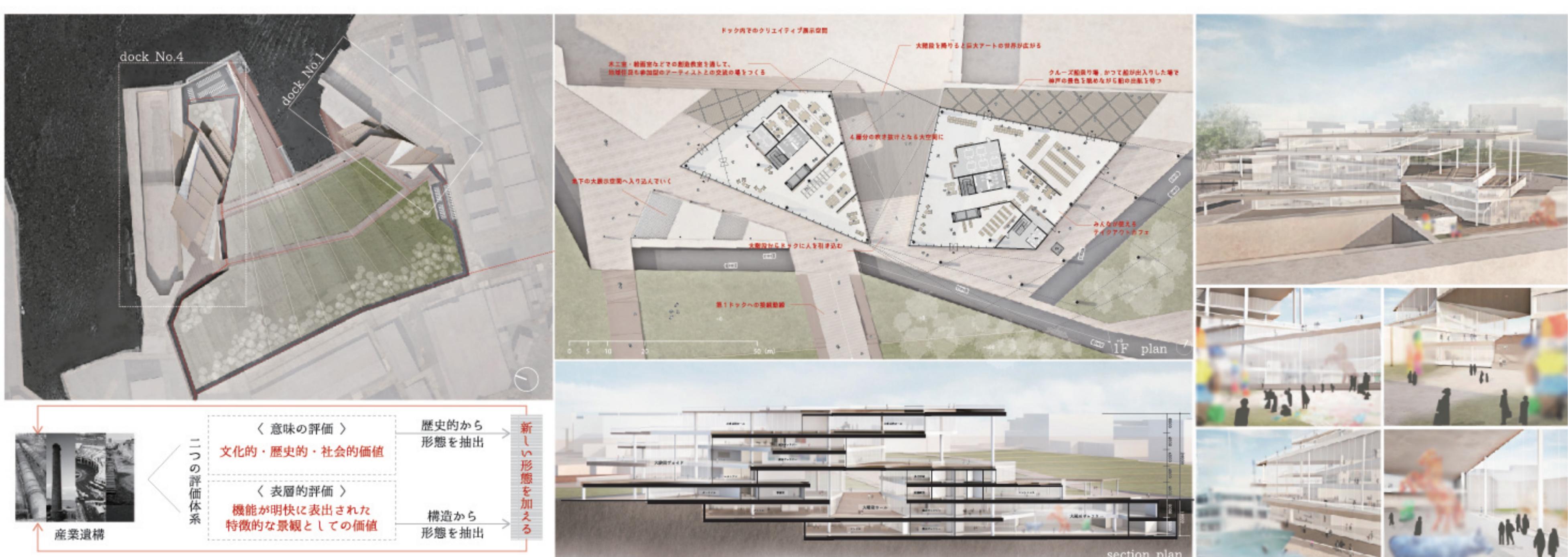


産業遺構における歴史的資源を活かした創造空間の設計 一川崎重工業神戸工場造船所を対象として一

田中はづみ（楢葉研究室）

日本を支えてきた産業遺構が各地で役目を終えつつある現在、産業遺構の保存と活用に関する議論が活発になってきている。建築という視点においても、改修や保存という分野にとどまらず、リノベーションやコンバージョンなど積極的に産業遺構の活用を目指した再生提案が多く見ら

れる。本研究・提案では産業遺構の再生において、産業遺構の持つ特徴的な形態や歴史、文化性等を分析し、歴史的な価値を十分に尊重しつつ新しい価値を加えることで、利用性を高めながら未来に歴史を継承し続けることのできる「歴史的価値を尊重した建築」の設計を行う。



都市における既存ストックを活用したネットワーク型大学キャンパスの設計

西村卓馬（楢葉研究室）

新長田駅前に位置する商店街のビル群には、多数の空きテナントが存在しており、都市の空洞化を招いている。それらを個別的ではなく、長田の街全体の要素として総合的に利活用していく手法として、地域に密着したネットワーク型大学キャンパスを挿入することを提案する。新長田駅

に隣接した敷地に大学の拠点施設を計画し、商店街の中の空きテナントには大学の機能を点在させる。学習の場に住空間を挿入する拠点施設と生活の場に教育空間を挿入する点在施設群という二つの提案から、都市を舞台に新たなキャンパス空間が展開されていく。

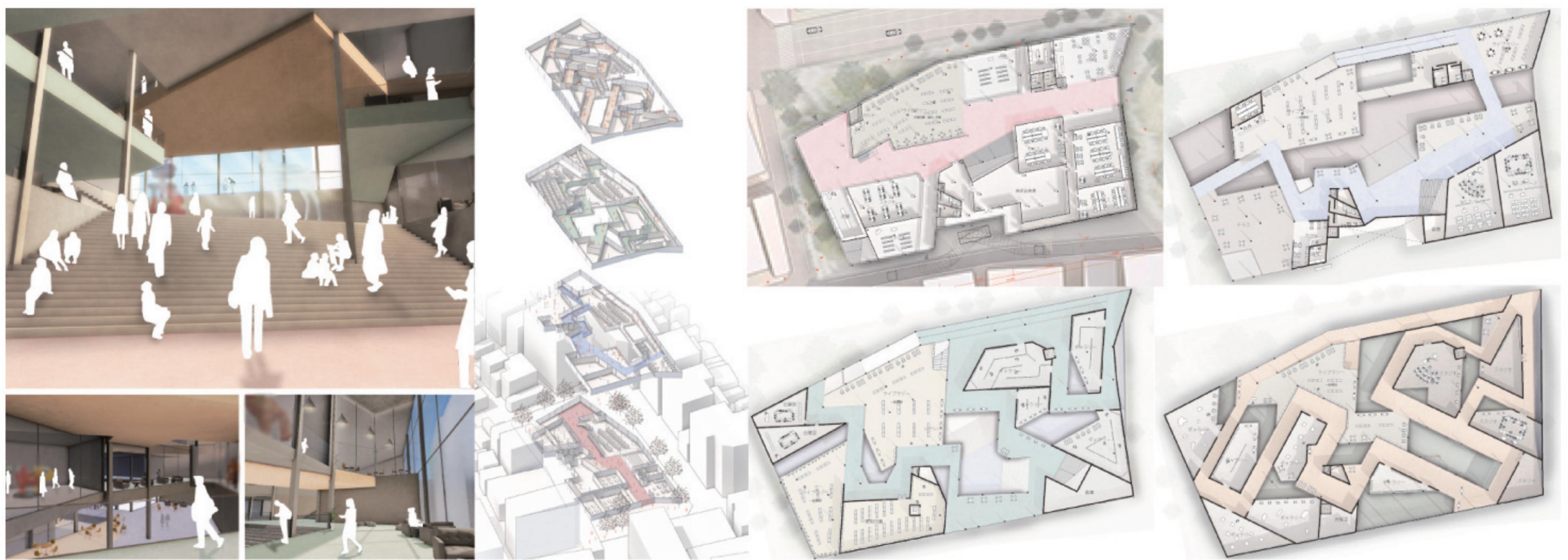


都市の体験と繋がる複合シークエンスを持つ空間の設計 一建築空間における体験の記述を通して一

山岡義大（楳橋研究室）

建築物を考える際に人に伝えるときに必要なものなどをノーテーションと言い、建築においてそれは施工のための設計図書やイメージを伝えるためのダイアグラムと多岐にわたる。建物自体の記述にのみ終始てしまっている現代のノーテーションはその内部で起こる体験や主観的な人の

動きを漠然にしてしまっているのではないか。本研究では建築内部の体験を生み出す要素としてシークエンスに着目し、記述を試みる。建物自体の記述ではなく、建物内部で起こる人の体験の記述を通して設計を行うことで現在の建築にはない体験を持った建築の設計を行うことを目的とする。



縮小社会における循環型土造建築の設計 一愛知県北設楽郡東栄町を対象として一

池田みさき（遠藤研究室）

衣服は、身体という個別の決まったボリュームに対して、新たに境界を設けることによって、元々の身体を引き立たせる効果がある。建築においても、地形やプログラムという個別の条件に対して、どのような建物の表層の形を持つかという問題において、元々の地形を変化させながらも、

新たな魅力的な地形の一部としての建築が存在できると考え、建築が地形の一部となり、一緒になってその場所の自然地形の魅力を引き出す空間の研究の手掛かりとして、衣服と身体の構成に着目し、建築の屋根の形態から全体の計画を考える提案を行った。



失われた記憶の劇場 一作曲家三宅純の音楽の分析を通した劇場空間の設計一

北野優真（遠藤研究室）

マジカルオーディオムービー。作曲家三宅純の音楽はしばしばそう表現される。ある種の音楽は人に強い視覚的なイメージを想起させる。彼の音楽作品、『Lost Memory Theatre』もその一つで、人々が忘れてしまった記憶が流れ込む劇場がどこにあるとすればそこではどんな音楽

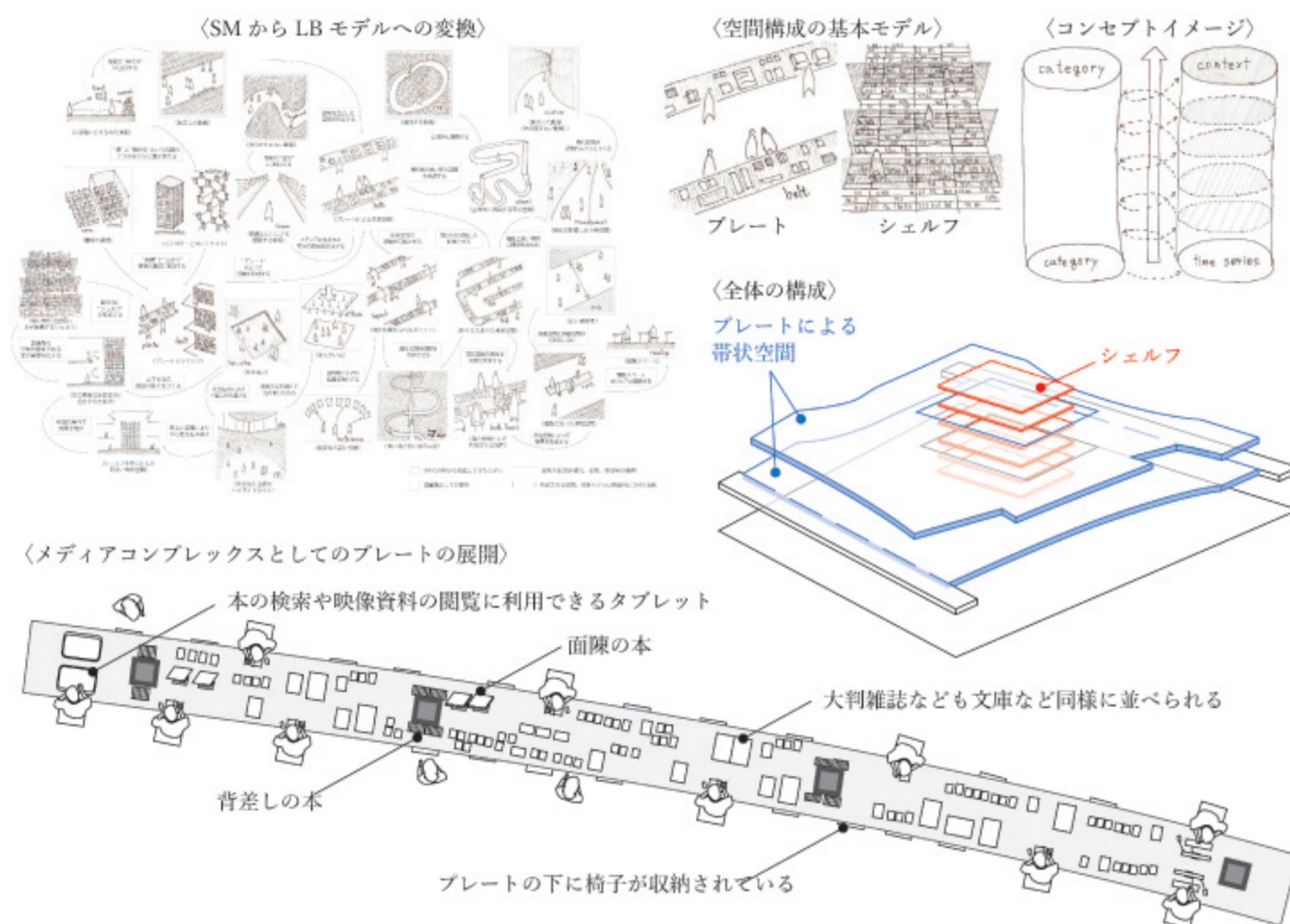
が流れているのか、という考え方でつくれられている。そんな人の記憶、想像力を喚起させるような建築ではどんな空間体験ができるのかに興味を持った。そこで彼の音楽を分析し、『失われた記憶の劇場』を幻出させるを通して、個人個人の想像力を想起させる建築をつくれないかと考えた。



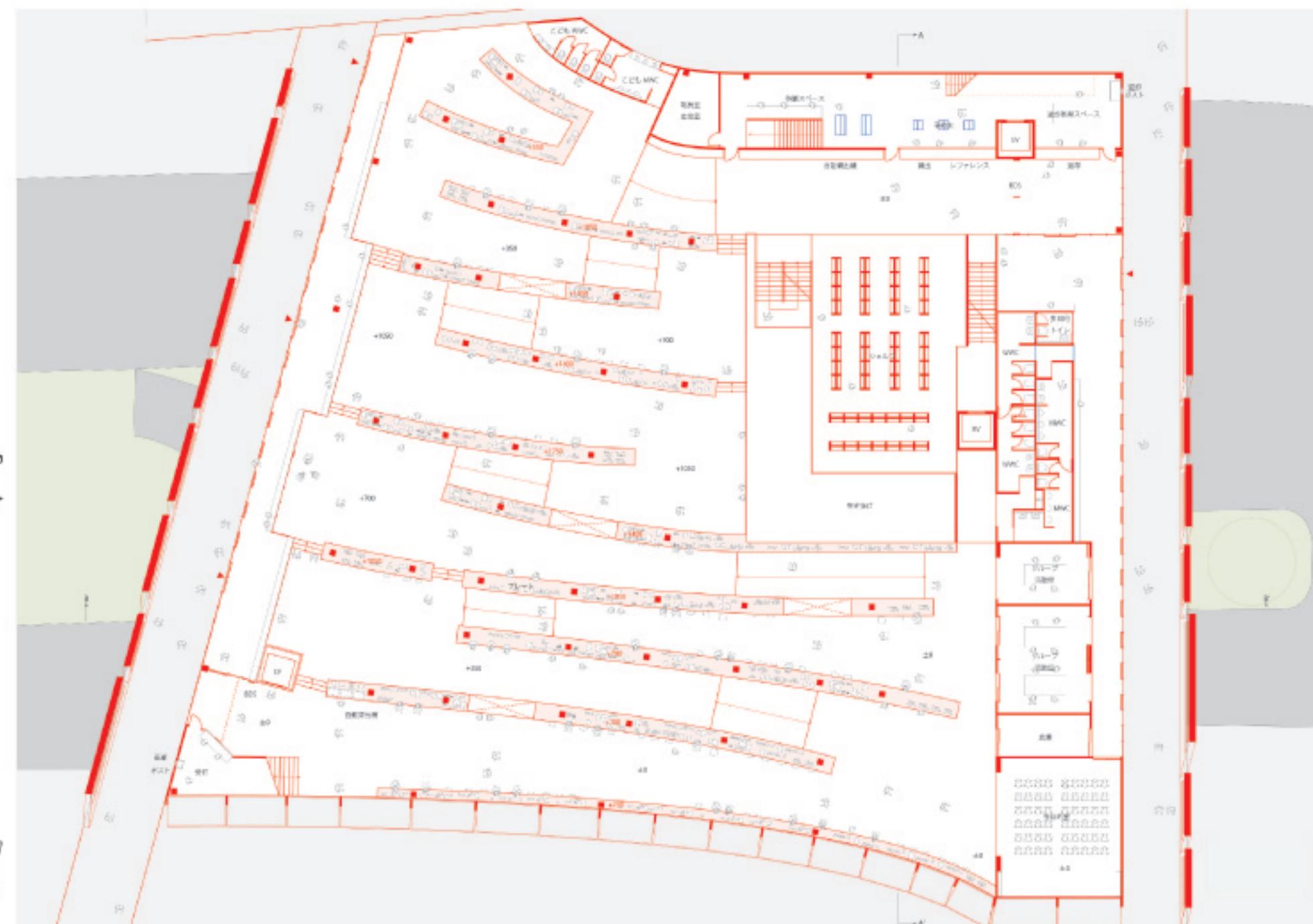
新しい都市生活の基盤となる図書館の設計

澤江隆志（遠藤研究室）

図書館の居場所としての需要が高まっている中、それを知的活動に繋げていくことが今の図書館の課題である。そして図書館を「日常的な居場所」であると同時に「活発な知的活動の場」へと昇華させることで、図書館が「新たな都市生活の基盤」となり、街に住む人々の生活をより



豊かにすることを目指した。まず図書館を「建築空間」と「システム」の2面から捉え、その中で出てきた「ゾーニング」と「カテゴライズ」という今の図書館を根底で支える手法に対して「リニアな空間」と「コンテクスト」を持ち込むことで「活発な知的活動」を誘発することを試みた。



環境と身体を媒介する建築空間の設計－北欧建築にみられる間接採光手法の研究を通して－

谷大蔵（遠藤研究室）

フィンランドでの半年間の生活を経て、北欧地域の建築家たちはその高緯度ゆえの少なく、柔らかい光を建築の意匠と一体的に扱って内部空間に取り込むといった、作家性を超えた地域性を感じた。その採光手法と建築空間の関係や身体の知覚を分析することによって、外部環境と均

質な距離感をもつ機械的な日本の都市環境を豊かにすることはできないだろうかと考える。ケーススタディとして、生活の質を向上することを目的としているが、機械による管理で快適性を作り出し、自然的な要素を感じ取れない都市部における緩和ケア施設へのオルタナティブの提案を行う。

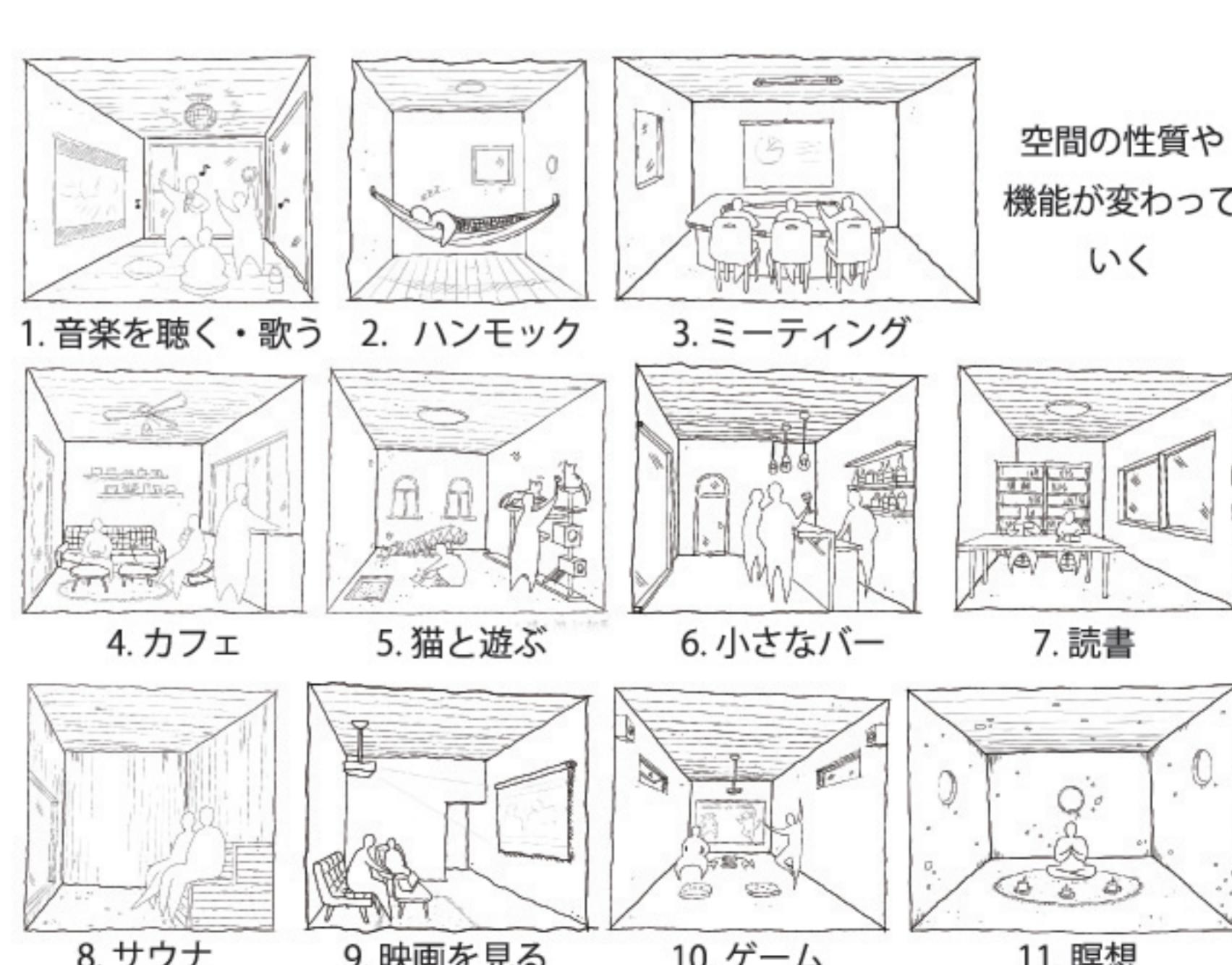


森の遷移に基づく空間の設計－産業構造の変化と時間地理学的分析研究を通して－

李清揚（遠藤研究室）

AI、ビッグデータ、IoT インフラが発展し、政治・経済・教育研究などあらゆる機能が大都市圏に集中し、緑は年から消え、そして住民たちは緑に対する渴望は薄れている。工業・製造業が衰退していく近未来に置いて工業用地を利用して森林都市を提案する。IoT インラフと実在空

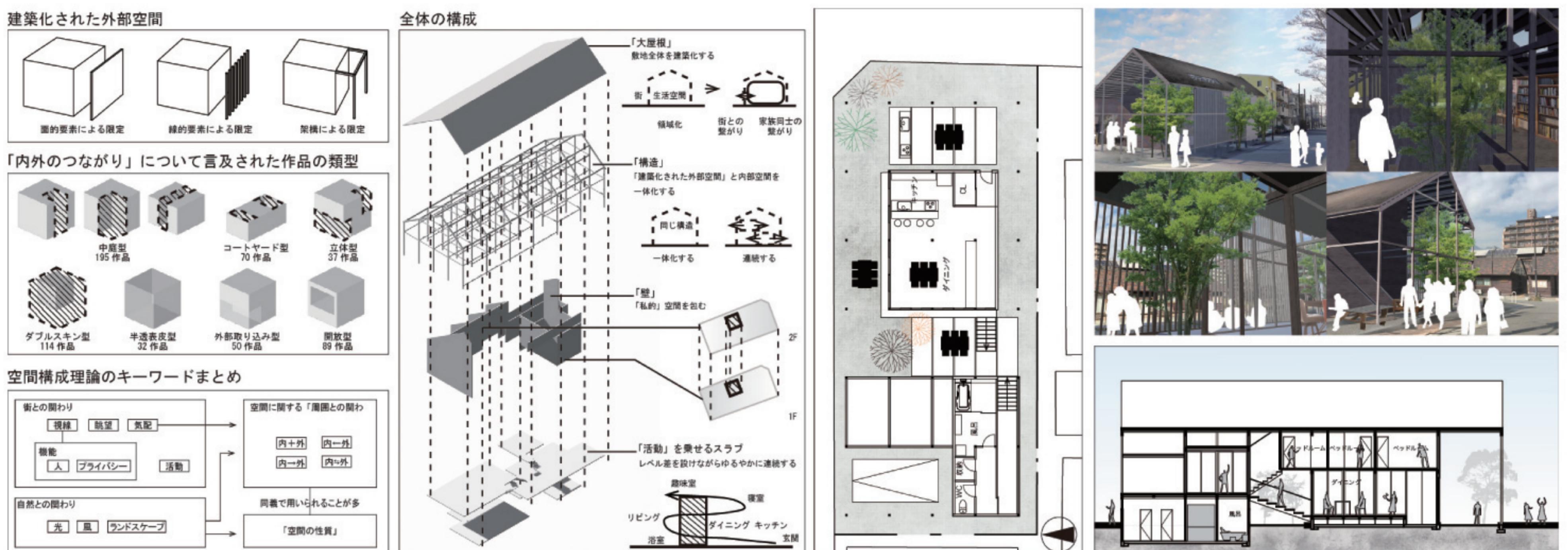
間を連結、地域の住民やその他の利用者を情報端末からも森林や樹木と触れ合うことができると仮定し、樹木の変化によって、空間の性質や機能が変わっていく設計部分では森と住む、遊ぶ、働く三つの面から建築的な提案をする。



『ダブルスキン型』の現代独立住宅作品における空間構成理論とその手法に関する研究及び設計提案 仲川絵理（末包研究室）

日本の現代住宅作品において「内外の繋がり」は全体を構成する大きな要素となってきた。しかし、市街化が進む現代では、限られた敷地の中でプライバシーを守りつつ「内外の繋がり」を生み出すことが重要になると考える。そこで、「内外の繋がり」に着目した現代独立住宅作品につ

いて、その空間構成理論と空間構成を分析することによって、設計の際に参照可能な基礎的な資料を作成し、建築の構成形式を解釈する上での1つの視点を明示する。また、そうした分析を基に、設計提案を行うことで新たな構成と空間の可能性を見出だすことを目的とする。

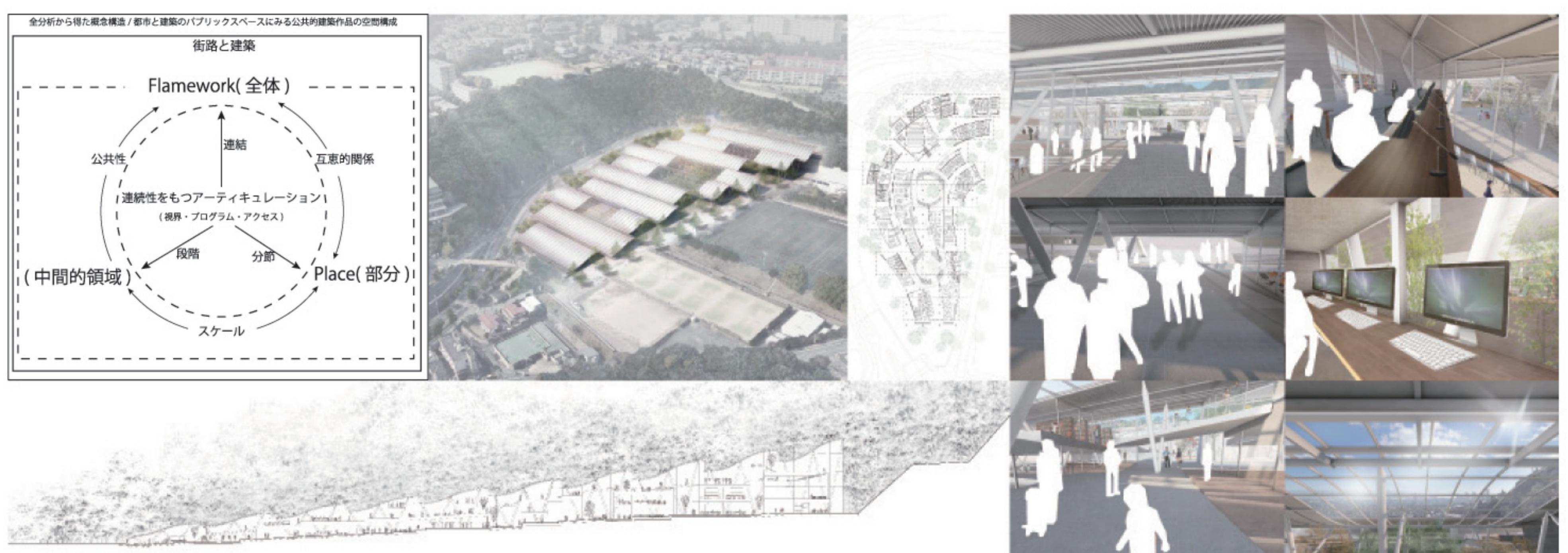


『都市と建築のパブリックスペース』にみるヘルマン・ヘルツベルハーレの建築思想とその空間構成に関する研究及び設計提案 宮崎信（末包研究室）

近年、日本は人口減少傾向にありながら、都市では未だに量的生産が続けられ、都市空間は蔑ろにされてきた。一方で、公共空間への関心は高まっていることから、公共性という視点を通して1つの建築の在り方を示すことを目的とした。オランダ人建築家ヘルツベルハーレの著書

『都市と建築のパブリックスペース』にみる建築思想と公共的建築作品の空間構成に関する研究及び設計提案
—公共的建築作品の空間の分析を通して—

『都市と建築のパブリックスペース』にみる建築思想と公共的建築作品の空間構成に関して、都市と建築の双方の視点から分析を行い、概念構造を見出した。その論旨から手法を再構成し、オランダに存在せずかつ日本の大半を占める斜面地において、大学キャンパスの設計を行った。



■修士設計講評会の様子

- [日時] 2017年12月26日(火)14:50-18:30
 [場所] 神戸大学百年記念館六甲ホール
 [担当教員] 遠藤秀平(教授)、末包伸吾(教授)、楳橋修(准教授)
 [ゲスト講評者] 石田壽一(東北大学大学院教授)、長坂大(京都工芸繊維大学教授)

